

第149回山口西田読書会(2017年9月2日)  
第148回(同年7月29日)のプロトコル

『自覚における直観と反省』より「序」旧全集版第2巻3頁冒頭から4頁右から1行目まで。

1. テキスト要約

この段落では以下の点が述べられている。

- ①『自覚における直観と反省』は大正二年九月から大正六年五月に至るまで、その前半は『芸文』に、後半は『哲学研究』に掲載された論文であること。
- ②始めは簡単に論結するつもりであったが、どこまでも徹底的に考えて見ようと思った結果、稿を重ねて一冊の書になったこと。
- ③この諸論文の稿を起こした目的は第一に「自覚」的体系の形式に依って全ての実在を考えようとしたこと(『善の研究』の場合には「純粹経験」を唯一の実在としてすべてを考えようとしていた)、第二にそれによって現今哲学(カント学派とベルグソン)の重要な問題と思われる価値と存在、意味と事実との一を説明しようとしたこと、この二点であること。
- ④「自覚」とは心理学者のいう自覚ではなく、先験的自我の自覚であり、フィヒテの事行 *Tathandlung* の如きものであること。
- ⑤このような示唆を得たのはロイスの「世界と個人」の第一巻の附録の箇所であること。そうして『思索と体験』に収めた「論理の理解と数理の理解」という論文を書いた時、すでにこの考えを持っていたこと。この考えをどこまでも徹底的に追求して見ようとしたのがこの書の起源であること。

2. 議論要約

最初に前回のプロトコルが唐露氏によって発表された。前回は『思索と体験』所収の「論理の理解と数理の理解」を読了した。その部分は上記⑤にあるように「自覚」の理解に大変重要な個所であるため、また初めて参加した人の理解を助けるため、時間をかけて理解の共有が試みられた。司会者が説明するのではなく、原文を掲げて、参加者がそれぞれの理解を披露するという形式を取った。

「ある命題が真理である」ことは、このカッコでくくられた命題が真理であることを含んでいる。そうすると「ある命題が真理である、ことは真理である」ことは真理である・・・と無限に続いてしまう。このことと、デデキントの無限の定義「集合  $S$  と  $S$  の真部分集合  $S'$  との間に全単射が存在している場合に、 $S$  は無限である」との関連、およびロイスの「世界と個人」に挙げられている、英国に居て完全な地図を描くという例との関連について考察した。

3. 哲学的問い

これから『自覚における直観と反省』を読むわけだが、それに先だってそもそも「直観」「反省」「自覚」はどのような関係にあるのか、考えて見たい。